

鷲山が推薦する地学図書

2 0 0 1 年 宇 宙 の 旅

2 0 0 1 A SPACE ODYSSEY

アーサー・C・クラーク

人間とは何なのか？科学とは？そして宇宙空間の大きさと数百万年という時間の感覚。地学教育を教える立場の教師がもちたい「時間空間感覚」「科学観」「人間観」に影響を受ける書です。私が同名の映画を見て取り憑かれたのは、小学6年生のとき、そして小説を読んで、映画を何度観てもわからなかった謎が解けたのは、地学教育に目覚めた30代でした。テーマ曲「ツァラトウストラはか語りき」は、その後宇宙のイメージとして年に何度も聞かされますが、今や映画を見た人も少なくなりました。映画と併せてぜひ本書を読んでいただければと推薦します。

●小説の概要

四百万年前のアフリカに、「ヒトザル」の群れが、飢えと肉食獣の脅威にさらされ、苦しい生活をしてきた。そこに第一の「モノリス」が現れた。それは巨大な直方体の石盤状のもの。その機能はヒトザルに道具の使い方と利益を教えるプレゼンテーションであった。(この部分は映画ではわかりにくい) 次の日、ヒトザルは、その学習の成果で骨を打ち下して動物を倒し、肉食を開始、次に脅威のヒョウまで倒すことに成功する。(映画では、水場争いをする別のヒトザルグループのボスを撲殺する=初の戦争)

数百万年の時間が過ぎ、2001年にはその「骨」が変わった21世紀の科学技術の時代となっている。月面の重力異常から第二のモノリスが

発掘される。発掘されて、太陽が当たった瞬間、強烈な電波が土星の衛星に向けて発せられる。惑星間宇宙船ディスカバリー号は土星の衛星(映画では木星軌道上)に向かう。最後に一人生き残ったボーマン宇宙飛行は、土星の衛星の表面にそそり立つ巨大だが相似形の第四のモノリスに遭遇。接近するとそれに吸い込まれ、広大な宇宙空間の旅を経験する。第四のモノリスにより、モニターされた後、その使者として「スターチャイルド」に生まれ変わり、地球に向かう。

●描かれるリアルな空間、時間感覚

SFの中には、スターウォーズのように、数百光年はなれた場所とリアルタイム通信ができるように、時空の問題を無視したものもある中、土星までのとてつもない距離感の描写は物理的に正確であり、地球との交信時間、木星を通過するときの光景など、宇宙の空間をイメージするトレーニングができます。

また、ヒトザルが第一のモノリスに出会ったとする四百万年前とは？(最近の研究ではさらに遡る)恐竜が絶滅したのは6500万年前なので、地質的には、現在の風景が形成される時代にあることなどが、感覚的にわかります。100万年を一昔として考える地質時代を理解する助けとなります。

●科学、技術、そして人間とは何か

今や2001年は過去になってしまいましたが、映画と小説が書かれた1968年当時にクラークの予言した未来の技術は、かなりその通りになっているのに驚きます。ヒトザルが「武器となる動物の骨」を手にした時に「自然を理解し、自然をコントロールする術」を獲得した「人類」が誕生したのです。映画では、敵のボスと撲殺し、

最初の戦争に勝利したヒトザルが空に向かって武器に使った「骨」を放り上げます。それが300万年の時を超えて、宇宙空間を周回する白い人工衛星にパッとかわる演出が見事です。最初の石やこん棒も、現代のコンピュータや行き過ぎたスーパー兵器と何ら変わらない、また、相変わらず殺戮の恐怖を克服できないでいることも、人間とは何か、科学技術とは何かを深く考えさせられる書です。

(横浜市立北綱島小学校 校長 鷺山龍太郎)